

## ボルネオにカラオビハエトリを求めて

池田 博明

2011年夏の神奈川県高等学校教科研究会理科部会の海外研修の調査地は、ボルネオ島だった。旅行期間が10日間と比較的短期間だったし、谷川明男博士と同行できてクモ班を作れそうだったので、参加申し込みの締切を過ぎていたが、研修団長の両毛明史小田原高等学校教諭にお願いして参加を受け付けてもらった。その後、送られてきた参加名簿を見ると、ニューギニア旅行の夜間観察で同行した高橋孝洋秦野市くずはの家館長の名もあった。

ボルネオ島でのクモ観察は、毎日、午前と午後、夜間と徹底的に行われ、それなりの成果を挙げることが出来たが、それは別稿に譲ることとして、今回私自身の目的のひとつはカラオビハエトリ *Siler collingwoodi* を見つけることであった。

カラオビハエトリは沖縄で出会うハエトリグモのうちもっとも美しいクモである。タイプ標本は雄で、ポーランドのプルシンスキーが再記載しており、その図と記載から、このクモ(図1の写真は伴満氏撮影のもの、西表島産ではなく、奄美大島産)を *Siler collingwoodi* と池田は予想し、カラオビハエトリと呼称した(池田1996)。カラオビのカラーは「カラフル(色彩豊かな)」という意味とタイプ標本が採集された香港、つまり中国大陸の「唐」という意味をかけている。ところが、ケンブリッジが1871年に記載した標本のタイプ産地は「香港」ではなく、実際にはボルネオであった。その辺の事情は最後に資料を紹介する。

日本蜘蛛学会の大会で発表後、そのまま放置してしまっていたが、沖縄でクモの未記載種をたくさん採集されている馬場友希博士が、沖縄県西表島産の標本をもとに再記載してくださった(Baba 2010)。触肢構造が同一なため、ホロタイプ自体はチェックせず、タイプ産地を香港と記して特にディスカッションはしていなかった。色彩の型のちがいは毛の抜ける程度によるという。プルシンスキーの再記載には背甲の色彩が書かれていないが、馬場博士の再記載では「背甲は基本的に赤色で青っぽいメタリックな毛で被われ、白毛で縁どられる」とあった。

これでカラオビハエトリは片付いたと思ったひが多いと思うが、ことはそれほど簡単ではなかった。私は馬場博士の論文に千国安之輔「写真日本クモ類大図鑑」(1989)の「アオオビハエトリの一種」が取り上げられていないことを不審に思った。所検標本も西表島産ばかりなのだ。奄美大島や沖縄産のカラオビハエトリになぜ触れていないのか。標本はあるはずなのに。



図1 カラオビハエトリ  
*Siler collingwoodi*



図2 ボルネオ産のオビハエトリグモ属の一種  
*Siler semiglaucus*

その辺の事情を谷川明男博士に尋ねてみると、「西表島産は背甲が青緑色に見えるが、奄美・沖縄産の個体は背甲がだいたい色で青い線が入る。千国の写真図鑑も奄美・沖縄型である。この明確な色彩型の違いを重視して、馬場博士は西表島産に限定して同定した」という説明だった。ふたつの型の問題は分布を含めて、今後の詳しい研究が必要とされよう。

さて、問題を解決するためにもなんとかボルネオでカラオビハエトリを取らなければならない。沖縄では里山に普通に生息し、草本上を徘徊するクモである。サバ州のタンブナン村であちらこちら探したが見つからない。ビーティングしても落ちてこなかった。

ところが、2011年8月8日の午後、宿泊しているタンブナン村のホテル、セブンロッジの隣室の小澤めぐみさんが、外の洗濯物の上にハエトリグモがいるというのだ。そっと持参されたクモがなんとカラオビハエトリと思われた雄（図2）だった。

重要なクモが自分で取らずに採集されたのであった。しかも写真で見てもわかるように奄美産のカラオビハエトリとは頭胸部背面の色彩が緑色で異なる。これは奄美大島産のカラオビハエトリは *Siler collingwoodi* ではないかもしれないと思った。その後このハエトリの雌も取ろうとロッジの庭をひまにまかせて歩き回ったが、見つからなかった。

しかし、検鏡してみても再び驚いた。ボルネオ産のクモは、よく似た別種 *Siler semiglaucus* (SIMON 1901) だったのである。このクモは日本には産しないため和名はない。既産地はスリランカからフィリピン、スマトラ島であった。「香港跳蛛図鑑」(Tsim 2006) にも出ていた。ちなみにこの図鑑に、カラオビハエトリは載っていなかった。香港にはカラオビハエトリは生息していないのかもしれない。いずれにせよ、*Siler collingwoodi* のタイプ・ロカリティーはボルネオのサバ州のラブアン島である。

今回の旅行では、記載された国のカラオビハエトリに出会うことは出来なかった。探索は続くことになった。

参考文献

- Y. Baba. 2010. A new record of *Siler collingwoodi* (Araneae: Salticidae) from Japan. *Acta Arachnologica*, 59(1): 17-19.
- 千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑. 偕成社.
- 池田博明, 1996. 日本蜘蛛学会第 28 回大会講演要旨 (西表島および九州のハエトリグモ 5 種). *Acta Arachnologica*, 45(2): 180.
- Proszynski J. 1985. On *Siler*, *Silerella*, *Cyllobelus* and *Natta* (Araneae, Salticidae). *Annales zoologici*, 39(2): 69-85.
- S.T. Tsim 2006. Photographic Guide to the Jumping Spiders of Hong Kong (香港跳蛛図鑑). Wan Li Book Co. Ltd.

【資料】ケンブリッジ O.P.-Cambridge が記載した *Siler colingwoodi* の採集地には事情があり、プルシンスキーが解説している。以下にプルシンスキーの記載文（英文）を翻訳して示す。[ ]内は訳註である。なお学名の綴りには若干の異同が見られる。

*Siler colingwoodi* (O.P.-CAMBRIDGE, 1871), comb. n.

*Salticus colingwoodi* O.P.-CAMBRIDGE, 1871: 617, 621;

*Maevia colingwoodi*: THORELL, 1892: 474;

*Cosmophasis colingwoodi*: SIMON, 1901: 549 et auct. seq.

所検試料: ♂ (ホロタイプ?) — “*S. colingwoodi* CAMB., Hong Kong” — coll. O.P.-CAMBRIDGE, Oxford; 2♀♀ — “*Cosmophasis colingwoodi*, Sumatra: Padang, JACOBSON, Sammlung REIMOSER” — Museum Wien (misidentified — 1♀ *Siler* sp., 1♀ *Carrhotus* sp.).

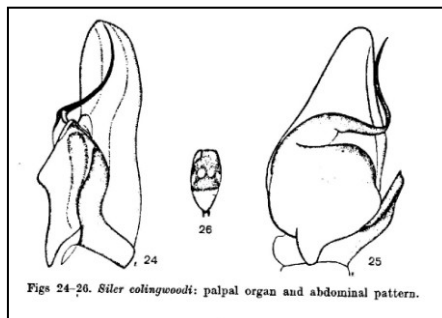
注意点. 本種の情報に関してはいくつかの著しい不一致がある。ケンブリッジはラブアン Labuan の 1♀ を記載しているが、彼のコレクションには香港産の 1♂しか含まれておらず、原記載の記載文と図は驚くほど色彩パターンが一致している[本種の雌雄の色彩パターンはほとんど同じである]。本種のホロタイプとして上記の♂をホロタイプとして受け入れるには次のような仮定を提案しなければならない。

1. ケンブリッジのコレクション全体に、“*S. colingwoodi*”という標本はたった一点だけである。私の知識だけでなく、科学界にとってもこれだけである。いくつかの目立った特徴はケンブリッジの原記載とぴったり一致するし、違いは当時の顕微鏡の性能の低さや仕事での集中度の低下によって説明できよう。ケンブリッジの初期の記載は途方もない形態的誤りを含むことが証明されているし(プルシンスキーらの 1980 年の論文を参照)、現在考えられる起こりうるミス(♀と♂の取り違い、一対の大きな丸い点と白い二対の点が一緒になる)がそれらと一致している。

2. 香港産の 1871 年にケンブリッジが記載した種はひとつもなく、大部分はラブアンである。ラブアンは、[英領]北ボルネオの海岸に近い小さな島である。香港と同様に、ラブアンには「ビクトリア Victoria」と呼ばれる場所(首都?)があった。もしラブアン産の標本がたまたま「ビクトリア」とラベルされたとしたら、コレクションでラベルを書く作業中に、機械的にふたつの「ビクトリア」を混同してしまうことがあるだろう。未知の小さな地点を一般的な地名に変えてしまう 19 世紀の習慣を思い出してもらえば、ケンブリッジがラブアンの代りに「香港」と書いた様子がたやすく想像できよう。

上記の仮説はラブアンが香港で新しい標本を発見してチェックされるべきだ。ライモザーのコレクションのスマトラ産の“*Cosmophasis colingwoodi*”の 2♀は誤同定だった。それぞれ 1♀は *Siler* sp.で 1♀は *Carrhotus* sp.だった(図 27-29)。*Siler* sp.の方はシモンのコレクションの“21277 *Cosmophasis weyersi* ES. Sumatra/WEYERS”におそらく一致する(図 30-31)。レーバーの 1954 に見られるインドシナの“*Cosmophasis colingwoodi*”は私にはなんの情報もない。おそらくミスである。

オスの記載. 触肢は他の *Siler* 属に似て、側方に伸び、側面観ではやや波うった大きなけい節突起を持つ(図 24-25)。移精針は長く、横に屈曲し、さらにその先で屈曲、前方を走って、やや波うつ。*Siler* 属にいくぶん類似するがやや変わっていると解釈される。バルブは大きく、角が丸い立方体で後方[図では下方]に膨れた隅があり、前半分[図では上方]ではやや腹側[24 図の左側]に突き出している。変化した *Siler* 属と考えることもできるが、確かではない。しかし第 1 脚のけい節には背側と腹側に長いブラシ状の刺毛がある。腹部のパターンは図 26 に示した。腹部の前方 3 分の 2 にはまんなかに対の白い点があり、二対の白い斜めの横線模様がある。腹部の赤い部分は黒い線で縁どられ、腹部の後方 3 分の 1 の輝く緑色の部分と境になっている。緑色の部分には側面に一対の白い点があり、黒線で閉じられている。糸疣は現在は灰色がかかった茶色。美しい色彩は新鮮な個体、特に生きていたときにはたいへんに目立ったに違いない。



Figs 24-26. *Siler colingwoodi*: palpal organ and abdominal pattern.